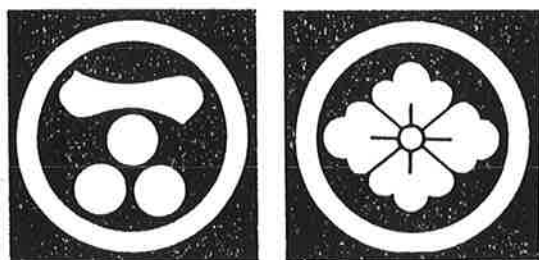


薬師さま・永井家・父と私



カット：永井家の家紋：左が定紋，右は女紋（女紋は、定紋が女性用としてきつい感じを与えるとのことで、やさしさを表わす意味合から女性専用のものになった）。

永井恒司

私は、姉が医者であり、親戚にも医者が多かったことから、医者になることを勧められ、当初は自分もそのつもりでいた。ところが、医者の仕事を近くで観察しているうちに、病気を直接に直しているのは、医者ではなく、薬である、と思うようになった。いとも簡単にそのような考えに切り変わったのは、私が群馬県の赤城山の麓の村に生まれて育ったことと無縁ではない。村にはたくさんのお宮やお堂があって、そこでよく遊んだことや、縁日のことなども記憶に残っている。それらの中で薬師さま（薬師堂）はあっても、医師さま（？）はない。人々は薬師如来にすがって良い薬を求めているのである。奈良にも薬師寺はあるが医師寺というのではない。こうして、私は生まれ育った環境から、薬学が貴い学問であることに気付き、それを専攻するようになった。それに加えて、今日の私の生き方に、大きな影響を与えているのは、私の生まれた家系と、父永井丑之助である。

父親が年をとり社会的地位とともに人格にも長じたときに生まれた子供は、その父親を尊敬し見習う場合が多い、といわれるが、私もその一人かもしれない。例えば、東大に残りたいという気持ちから一転し、多くの薬学の卒業生をだしている私学へ移って薬学のために頑張ろうという気になるのはやかった。移って間もなく、ある国立大学が私を教授に選考して下さったのを、「石のうえにも3年」という言葉もあるんだから、と借しげもなく断り、当時の学長から涙を浮かべて喜ばれ、逆に多くの人から呆れられた。東大助手からいきなり教授に迎えてくれた学長への義理が大切と思ったのである。こんなのは、いずれも父親譲りではないかと自覚している。

小学校へ行くようになって、父が村では偉い存在であることに気付いた。それは、入学式や卒業式のときに必ず前の席に座っていたからである。ただ、父の名前が永井丑之助であることが気になっていた。“丑”ではなく、もっとカッコいい名前はなかったのか、と恥ずかしく思っていた。あるとき、分家の叔父さんに、私は何気なく、父の名前のことが恥ずかしい、と本音を伝えた。ところが、とんでもない奴だ、と叱られた。そして、「われら永井の大先祖は、徳川三代将軍のお小姓の永井熊之助だ。おまえの親父の名前はそこからきている。丑年生まれだから、丑之助になったんだ。ほかにも永井ナン之助という名前をもらったのがいるじゃないか」と諭された。どうやら、永井家の一員は大きな顔をして世間を渡っているんだ、といっているらしいことがわかった。

ところが、最近になって、さきの叔父さんの言葉がまんざら嘘でないと思わせることが起った。実は、この子供のときの思い出を研究室でも話したことがあったので、それを覚えていた者が、「永井先生が前にいったことが嘘じゃなかった」と私に対する認識を変えたようなことをいいたしたのである。それは大原麗子主演のNHKの大河ドラマ“春日局”の中に、徳川三代将軍家光の小姓永井熊之助という名前が出てきたからである。春日局は家光に仕える小姓として自分の息子を含む5人を選んだ。彼等はいずれも家光将軍を助け、さらにその子孫はずっと徳川家を支える重要な役割を演ずることになった。その一人永井熊之助が私達の大先祖で、その分枝に当たるのが私達の近い先祖だといひ伝えられてきた。

上州の永井家の始祖は、江戸の旗本（伝承では、永井

熊之助の子孫)から徳川幕府直轄の前橋領の奉行に任用されて、領主(松平家)とともに派遣されてきた。私達の先祖永井三郎兵衛はその家に生まれた。彼は、嫡男でなかったこともあり、勢多郡の豪族で男子のいない齋藤家の婿養子に迎えられた。しかし、彼は永井姓を捨てる決心ができず、齋藤家は跡継ぎとするわけにはいかなかった。とはいえ、夫婦仲がよいので、齋藤家は思案のあげく、赤城山の西側の利根川沿いの所有地を与えて夫婦を住ませた。300年以上前になる。その土地で、彼は村の指導者になり、名主(なぬし)になった。この人物以後の私の家の系図は、前橋市龍蔵寺町の私達の菩提寺である天台宗青柳山龍蔵寺の過去帳によって確認することができる。また、初代永井三郎兵衛がその寺に納めた太鼓が堂内に現存する。先祖の名前が奉納者として書かれている太鼓があることは、私達一家の誇りでもある。

その永井三郎兵衛の直系が代々名主を継ぎ、いつの間にか“三郎兵衛様”(さぶろべえさま)と呼ばれ、廃藩置県により私の曾祖父が最後の名主(続いて新制度下の初代村長)となるまで続いた。この曾祖父は秀れた名主として、ときの領主の淀藩主稲葉正邦氏(後に子爵)から注目されていたとのことである。氏が、廃藩置県にともない領主を退くに当たり、曾祖父に記念として特別にくれた自分の写真と色紙が、私の家に保存されている。

三郎兵衛様という呼称は私が子供の頃にも耳にした。現在、そこに住む永井一族は本家・分家および、そのまた分家を合わせて20数軒位になる。中には永井姓を名乗らない家もある。これは、越後から移住して来て、“よそ者”扱いはされないために、三郎兵衛のところに“わらじ脱ぎ”(奉公)し、何年かして分家してもらったのである。この人達は、親子代々、三郎兵衛様に足を向けて寝てはならないといわれながら育てられたようで、私の家に大事が起れば、真っ先に駆けつけてきてくれた。私達兄弟が大学に入り東京に出てきたとき、すでに東京に住んでいるその子孫の方々に大変お世話になった。

私は、前述の最後の名主永井三郎兵衛の孫の永井丑之助の末子として生を受け、300年も前に建てられた古い家で育った。この家は、一番奥の部屋は吊り天井になっていて、床の直ぐ下まで土が盛ってあった。現代流に言えば、会議や初等裁判を行なうところだったようである。つまり、人が寄り付けないようになっていた。この古い家屋は、いまから30年前に建て替えられた。

時代は変わっても、父永井丑之助はやはり三郎兵衛だった。永井の総領に生まれ、父親を早く亡くし、跡を継いで村に残り、寺に通って独学した。若いときから、自分が村の責任者・指導者であるという自覚に満ち、いつも村の人達のことを考えていた。村の人達も父を頼りに

していたことがよくわかる。媒酌・縁切り・就職斡旋、何でも引き受けた。村の人達に限らず、代議士さん達も、ただ票欲しさからだけでなく、よく頼って来た。蛇足ながら、村の広報誌などに父が書いた文章は名文であった。また、父の努力でできた校舎や橋、道路などがあちこちにあり、その名前を示す名板や刻名は父の達筆な書によるものであった。晩年、地方自治功労者として勲5等に叙せられ瑞宝章を受章した。

父が亡くなって奇妙なことが起った。氏神さまの所有地は氏子総代の父の名義になっていたし、村の共有地のある部分も父の名義になっていた。これは、三郎兵衛の時代からの続きであった。ところが、先年、村の人達が、その土地をゴルフ場建設のために売却した。ついては、依然永井丑之助所有のものとなっていたのだから、まず土地所有者の変更を先に行なうべきだった。さらに、それには、所有者永井丑之助の財産相続権をもつ私達兄弟姉妹の了承が必要だったのである。私は、そのような土地登記の仕組みを知る由もなく、また土地を欲しがったわけでもないが、村の人達が正規の手順を踏まずに土地を売却したことが我慢ならなかった。

その反発の趣旨は、父が体を張って守ってきた村の財産が、みんなのものだからいいだろう、という軽い気持ちで扱われたように思えたことである。私の兄姉達は面倒を起さず直ぐに判子をついた。断固として判子をつかない私を攻略するために、村の重役さん達が、引切りなしに、朝5時起きして、東京まで出かけてきて、上州名物を手土産に、私のところまで頭をさげて来られた。みんな、子供のときからの名だたる頑固者の私には、これしか道がないと思っていたようである。遂に、村の人達が父永井丑之助を粗末に思っていないことが確認できたので、判子をついた。こうして、ゴルフ場建設がかなり遅れた。ゴルフ場建設を抑制しようとする強い世論もあるくらいだから、私の横車も単純な横車では終わるまい。



ながい つねじ 星薬科大学教授・薬学博士

筆者紹介 [経歴] 昭和31年東京大学医学部薬学科卒、東京大学薬学部助手を経て46年より現職。[専門] 薬剤学・製剤学(薬物送達システム:DDS)。[おもな著書] BIOADHESIVE DRUG DELIVERY SYSTEMS (共著)。[趣味] 芝居観賞。[連絡先] 142 品川区荏原 2-4-41 (勤務先)。

(© 1992 The Chemical Society of Japan)